笹川平和財団主催テーマ別イベント
石破総理特別挨拶

　アフリカ各国から御参加の皆様、笹川日本財団名誉会長、角南（すなみ）笹川平和財団理事長、鈴木ササカワ・アフリカ財団理事長、御列席の皆様

　本日は、「アフリカにおける持続可能・包摂的・対応力ある食料システムと地域経済の未来：ブルーエコノミーと農業の視点から」にお招きいただき、感謝申し上げます。

　今日、国際社会は、紛争による人道危機やエネルギー・食料危機、防災、気候変動を含む地球規模課題など、複合的危機に直面しています。中でも食料安全保障は、人間の安全保障を実現するための最も重要な開発課題の一つです。

　アフリカでは、過去には農産物の生産量の増加が見られる一方、人口の増加により消費量も増加しています。特に米や小麦は多くを輸入に頼っていると承知します。また、アフリカでは現在も半分以上の労働人口が農業に従事している一方、単位面積当たりの収量は世界平均に未だ届かないレベルです。

　農業の生産性向上が依然アフリカの大きな課題である中、「持続可能・包摂的・対応力ある食料システムをいかに構築するか」という本イベントのテーマは非常に意義のあるものと考えます。

今年１月のアフリカ連合（ＡＵ）特別首脳会合では、ＡＵ全加盟国によって「カンパラ包括的アフリカ農業開発プログラム宣言」が採択されました。その際に打ち出された「フードバスケット構想」は、アフリカ各地の特性を活かし、地域別に優先作物を選定し、国境を越えて流通させるという構想です。強靭な食料システムの構築を通じ、アフリカ大陸の食料自給率を高めることを目的とした本イニシアティブを日本は支持しています。

日本には、技術や人材育成のノウハウ、課題解決策を現地の人と一緒に作り上げる「現場主義」があります。例えば、ネリカ米の開発が知られています。これは、シエラレオネのジョーンズ博士による研究と日本人専門家の坪井さんの現場での実践が実を結んだものです。「カウンターパートと一緒に汗を流すことが大事」とのモットーの下、農家に丁寧に栽培法を伝えた上で、種籾（たねもみ）を渡し、多く収穫できた種籾を周囲の農家に広げていくやり方でネリカ米が普及していきました。現在ではアフリカ２３か国で高品質のコメの収量増が実現したと聞いております。

本日開会するＴＩＣＡＤ９では、日アフリカ双方の強みを生かした解決策を共に追求する「革新的な課題解決策の共創」をテーマに掲げています。この方向性と軌を一にする農業、水産業の分野での日本の取り組みをご紹介いたします。

ある日本企業はアフリカの農家の方に、最適な水や肥料の投入量や散布スケジュールを提供する仕組みを通じ

た協力を行っています。衛星やセンサーから取得した圃場（ほじょう）のデータが、ＡＩにより分析されているそうです。

　また、アフリカの持つ海洋という資源を活かす「ブルーエコノミー」のアプローチも食料供給を改善する鍵となり得ましょう。日本には養殖、デジタル技術を活用したデータ管理などのノウハウがあります。これまでも笹川平和財団をはじめ、日本の機関がアフリカにおける持続可能な漁業や養殖業の振興、違法漁業対策等の面で貢献してきています。

　ＪＩＣＡの「アフリカ食料安全保障イニシアティブ」では、２．５億人分の食料生産や９．２万人の栄養改善、小規模農家１２万戸の所得向上等を通じて、アフリカの強靭な食料システム構築に協力しています。さらに、ＪＩＣＡと世界銀行の協調融資によっても、アフリカの食料安全保障や栄養の改善に貢献していきます。

　日本は、本日ご列席の皆様に加え、アフリカ各国政府やアフリカ連合、アフリカ開発銀行、また国際機関・民間企業を含む様々な関係者の皆様との連携を強化していきます。アフリカの食料システムの強化に貢献し、より多くの方々が安心して暮らせる未来を実現すべく、様々な取組や協力を推進していきましょう。

　本日の会合が実り多いものとなることを祈念いたします。御清聴ありがとうございました。

（了）